

# ヴァージニア・ウルフと両性具有理論

山内藤子

1

ヴァージニア・ウルフは、エッセイ『私だけの部屋』(A Room of One's Own)において、コールリッジの思想を用い“a great mind is androgynous”<sup>1</sup>(「偉大な精神は、男女両性を具えている。’)と言っている。これは、少女と青年の二人がタクシーに乗り込む情景(女性と男性が一つに統合された情景)を窓から見て、ウルフがあるリズムカルな秩序と調和を感じた事から思い起こされた思想である。さらにウルフは続けて次のように述べている。

... the androgynous mind is resonant and porous; that it transmits emotion without impediment; that it is naturally creative, incandescent, and undivided.<sup>2</sup>

このようにウルフは、「男女両性具有」の精神を高く評価し、ゴールズワージーやキップリングは、男性的特質しか内に有しておらず、彼らの小説は、一方的で説得力に欠けると批判している。そして、両性具有の典型として、シェイクスピアを上げ、特に小説家は、両性具有的存在であるべきだと強調している。

ウルフは、一面的性格、片寄った人間性を嫌い、常に調和のある全一的人間を求めていたのであるが、これはルネッサンスの人間像とも言えるものであろう。Edwin Berry Burgumは、“the recurrent theme of her [Virginia Woolf's] fiction is therefore the loss in the modern world of the Renaissance ideal of the well-rounded man, what our psychology terms the man of well-integrated personality, ...”<sup>3</sup>と言っているが、この“well-integrated personality”とはウルフのいう両性具有の人間性に他ならないであろう。

このように、両性具有の人間性を求めていたウルフは、又作品においても両性具有のイメージを追求していたようである。ウルフの作品からは、多くの二面性(duality)——「内」と「外」、 「生」と「死」、 「理性」と「直

感」など——が、見い出されるが、彼女は常にこれを統合しようと努力していたのである。そして、これら相反する二つの概念は、「男」と「女」という二元性に基づくと考えられ、<sup>4</sup>よってこれら二面性を統合する理論も又、「両性具有理論」と呼ぶことができるだろう。ウルフ自身、『私だけの部屋』の中で次のように述べている。

Some collaboration has to take place in the mind between the woman and the man before the art of creation can be accomplished. Some marriage of opposites has to be consummated.<sup>5</sup>

このように、ウルフが小説家として求めていた「両性具有」は、彼女の文学において、芸術理念にも通じる重要な要素の一つだと思われる。それゆえ、この小論では、ウルフの両性具有理論を作品をふまえ解明し、さらに心理学やフェミニズムとの関連からも考察してみたい。

2

まず、ウルフの小説に現れた、両性具有のイメージを分析し、彼女の文学におけるその意味を考えてみたい。

ウルフの小説における、両性具有のイメージといえば、誰もが『オーランドー』(Orlando)を思い浮かべる事であろう。これは、何世紀にもわたって生きつづけるオーランドーという人物の自伝的小説であるが、オーランドーは、男性から女性へと性転換するのである。この奇想天外なアイデアにより、ウルフは、文字通りの両性具有の人物(もちろん内面に着目した両性具有なのである)を描き、彼女の両性具有理論を具現化させている。

初期の作品、『夜と昼』(Night and Day)では、題名において、すでに二面性が表れている。またこの題名は、主人公キャサリン・ヒルベリーの夜と昼に分裂された生活を象徴している。キャサリンは、昼には、祖父の伝記を執筆する母を助け、お茶の用意をし、客をもてなすといった、社会的な「外」に向けた生活を送っている。これに対して夜には、内密に数学や天文学の勉強を自室に閉じこもってするという個人的な「内」に向けた生活を送っているのである。ここで「昼」の世界は、現実、事

実を象徴し、「夜」の世界は、理想、夢を象徴しているとも考えられる。キャサリンにとって、この二つの世界の生活は、共に重要でありどちらかを切り捨てるというわけにはゆかない。それゆえ、彼女は常にこの「昼」の生活と、「夜」の生活の狭間で、バランスを保とうと苦悩しているのである。小説の最後でキャサリンは、ラルフとの結婚により、この二つの相反する世界を調和させようと決心する。つまりウルフは、ここにおいて、二つの世界を調和させ両性具有の世界を創造しようと試みたのである。しかし、いかに内的調和の生活が生み出されたかは、この小説では、はっきりと示されていない。

『ダロウェイ夫人』(Mrs. Dalloway) において、クラリッサとセプティマスは、対極的存在であり二面性を示していると言えよう。つまり、クラリッサは、「正気」の、そして「生」の世界に属する人間であり、セプティマスは、「狂気」の、「死」の世界に属する人間なのである。クラリッサは、「生」の象徴とも言える、パーティーを催し、人生を楽しむ事ができるが、一方、セプティマスは、戦争体験により、正常な感覚を失い、常に死に取り憑かれ、ついには自殺するのである。このような対極的な人物の内面を描く事で、ウルフは、一面的でない、複合的な人生を描こうとしたのである。ウルフ自身、1923年6月19日の日記に、“in this book [Mrs. Dalloway], I have almost too many ideas. I want to give life and death, sanity and insanity; …”<sup>6</sup>と書いている。この‘sanity and insanity’の二面性は、ウルフの manic-depression とも言うべき体験を元にして、描かれているであろう事も容易に、推測できる。

また、セプティマスは、ウルフ自身述べているように、クラリッサの“double”としての役割を担った人物である。それゆえ、クラリッサは、「生」に属する人物であるが、同時に常に、「死」をも見つめているのである。つまり、クラリッサの「生」とは、常に「死」と、隣り合って存在するものなのである。女友達サリーとの恋の最中には、“If it were now to die, 'twere now to be most happy.”<sup>8</sup>と、死を絶対的なものとして、崇める一方、パーティーの席上では、“she had never been so happy”<sup>9</sup>といった状態に陥り、生を享受するのである。そして、最後のパーティーの場面において、生と死は、セプティマスの死を知らされたクラリッサの内部で、融合される。クラリッサは、自殺したセプティマスを羨み、死に憧れるが、結局は「生」をもう一度選びとり、パーティーの会場へ出て行くのである。ここで、クラリッサの「生」は「死」をも包含した高次のものとなったと言

えるのではないだろうか。このクラリッサの到達した内面状態は、ウルフの求めていた両性具有的状态の一つを示すと思われる。

ウルフ円熟期の作品、『燈台へ』(To the Lighthouse) は、きわめて統一のとれた、美しい作品との評価が高い。これは、主人公ラムジー夫人の存在感が、大きくものを言っているためであるが、又、この作品に潜む両性具有理論にもよると考えられる。

この作品の中で、哲学者ラムジー氏とラムジー夫人は、対極的性格を持つ人物として描かれている。周知の通り、この二人の人物はウルフの両親がモデルとなっているのだが、それ以上に、ラムジー氏によって男性に属するさまざまな特質が象徴され、ラムジー夫人によって女性に属する特質が象徴されていると考えられる。

この小説は、“‘Yes, of course, if it's fine tomorrow’”<sup>10</sup>という、ラムジー夫人の息子へのことばで始まるが、これはラムジー夫人の母性を象徴したことばでもある。息子ジェイムズは、かねてより窓から見える燈台へ行きたがっており、夫人は息子のために明日そこへ行こうと計画しているのである。それゆえ、夫人のことばは、ジェイムズを歓喜させた。しかし、それに対しラムジー氏は、“it won't be fine”<sup>11</sup>と冷たく言放ち、ジェイムズに、父を殺したいほどの気持ちにさせる。ラムジー夫人は、ジェイムズを愛す故に、彼の気持ちを理解し明日晴れる事を願う“it may be fine”と言うのである。この事は、夫人の母性愛を示すと共に、彼女の主観的、情緒的特質をも表している。これに対し事実を追求し、真実のみを愛するラムジー氏には、息子の気持ちは理解できない。風向きにより、雨が降ると予知できるならば、いかなる場合においても「明日は雨」なのである。このようなラムジー氏は、理知的だが、偏狭的人間と言えるだろう。

この天候に対する、両者の発言でも明らかのように、ラムジー夫人は、作品中常に母性愛に満ち、感情豊かで、直観的、又主観的という、女性的特質の象徴のような人物であり、ラムジー氏は、真実のみを愛する理知的、客観的、自己中心的という男性的特質を示す人物である。

二人は、常にこのように対立した存在であるが、それと同時に、相補的存在でもあり、この相補作用により、夫婦が保たれているといえるのではないだろうか。真実を追求することに疲れたラムジー氏は、暖かい母性の象徴であるラムジー夫人を求め、一方、ラムジー氏の知性は、ラムジー夫人が常に感じている人生の混沌に、ある規律を与え、それによって夫人は、安定を得ることができ

る、といった具合なのである。このような相補作用で成り立っている夫婦という関係は、ある一つの両性具有のイメージを具現していると言えないだろうか。

また、この小説の要ともなっている「燈台」も、両性具有のイメージを持っていると思われる。10年を経て、ラムジー氏は子供達を連れて、燈台へ行くのであるが、16になったジェームズの心の中で対立する二つの燈台（子供の頃考えていた燈台と今、目前にある燈台）が、融合されていく。

The Lighthouse was then a silvery, misty-looking tower with a yellow eye that opened suddenly and softly in the evening. Now.....

James looked at the Lighthouse. He could see the white-washed rocks; the tower, stark and straight; he could see that it was barred with black and white; he could see windows in it; he could even see washing spread on the rocks to dry. So that was the Lighthouse was it?

No, the other was also the Lighthouse. For nothing was simply one thing. The other was the Lighthouse too.<sup>12</sup>

子供の頃、燈台は、ジェームズにとってロマンティックに輝く、やわらかな存在であった。言い換えれば、死んだラムジー夫人を彷彿させるイメージを持っていた。しかし、今燈台に近づいてみると、それは冷たく洗われ、荒々しく、ひどく現実的な建物であった。二つの燈台は、かけ離れたイメージを持つもの（「夢」と「現実」、「女性的イメージ」と「男性的イメージ」など）であったが、ジェームズの心の中でそれは一つのものに融合された。つまり「燈台」は、対立するイメージを包含した建物であり、両性具有の象徴とも言えよう。

さらに、ラムジー氏たちが試みた「燈台行き」も大きな意味を持つと思われる。一章において、エゴティスティックで偏狭の性格であったラムジー氏は、夫人の意志を継いで、燈台行きを決心したのであるが、ここに、夫人と調和していこうとするラムジー氏の態度が伺われる。さらに、燈台へまさに着かんとした時に、彼は、息子ジェームズの舵さばきを誉め、息子と父の和解を成立させている。これらは、ラムジー氏の片寄った男性的性質が燈台に近づくにつれ、序々にまるみを帯び、全一的、両性具有的に変化していったことを示していると考えられないだろうか。David Daichesは、“the journey to the lighthouse is the journey from egotism to

impersonality.”<sup>13</sup>とやっているが、‘impersonality’とは、両性具有的特質でもあると思われる。

さらに、小説の最後において、ちょうどラムジー氏達が、燈台へ着いた頃、画家リリーがキャンパスに引いた一本の線も重要である。芸術に「統一」(unity)を求めていた彼女は、キャンパスの真中に一本の線を引き、“I have had my vision.”<sup>14</sup>と言ったのである。この“vision”こそ両性具有思想なのではないだろうか。リリーは、絵の中に統一と全体を希求していたが、これは同時にウルフの希求していた両性具有とも言えるであろう。つまりリリーは、小説家ウルフの代弁者なのである。

いくつかの両性具有のイメージにより、複合的な‘unity’が、この小説に与えられている。それゆえ、統一のとれた美しさがこの小説には存在するのである。また、画家リリーに芸術理論を語らせることにより、ウルフ自身の芸術の致達すべき点（両性具有）を明らかにしているように思われる。

このように、ウルフの小説からは、多くの二面性が見い出され、さらにウルフは、その二面性の統一をもめざしていたと思われる。二面性のそれぞれが、男性面、女性面と分類されるなら、その統一を両性具有の状態と呼ぶことが可能であろう。

芸術において、調和、統一性、全体性は、美に通じる重要な要素である。ウルフも又、芸術家として、この内的調和、統一性を重んじ希求していたと思われる。そしてこの内的調和の状態が、ここで述べている、両性具有の状態なのである。すなわち、ウルフの両性具有理論は、彼女の小説において芸術的美をもたらす、重要な要素と言えるだろう。

また、“Modern Fiction”でも述べているように、ウルフは、小説において、人生の‘reality’を描くことを目的としていた。<sup>15</sup>この人間の内面に存在する、人生のrealityを描こうとした時、ある一つの見方だけでは、それは描くことができない。必ず相反する二つの見方、つまり複眼的見地から、ものを観察し、考える必要がでてくるのである。片寄った見方からは、片寄った人生しか見えてこない。これでは、小説——特にウルフの言う小説——は、描けないのである。二つの相反する見方を合わせ持つことこそ、両性具有と言うのであろう。

Blackstoneも又、次のように述べている。

There is the truth of the reason, and there is the truth of the imagination. The truth of the reason is pre-eminently the masculine sphere,

while the truth of the imagination is the feminine. Together, these make up what she calls reality.<sup>16</sup>

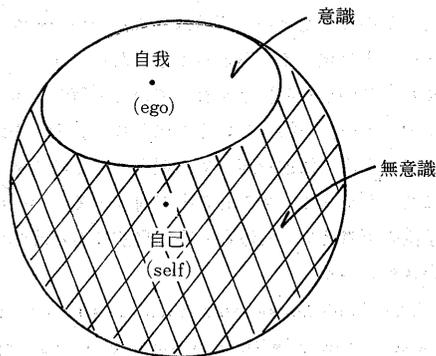
これらのことから、ウルフの両性具有理論は、彼女が、小説を書く上での基本姿勢であり又、基本的芸術理念でもあることが、明らかになったと思われる。

3

次に、心理学的側面から、ウルフの両性具有理論を考えてみたい。ウルフの小説には、常に対立する概念が存在し、さらに彼女は、これら二つの相反する概念を調和し、統一しようと、作品の中で努力していた。このような姿勢は、C. G. ユングの「個性化」(‘the individuation’) 又は、「自己実現」(‘the self-realization’) の思想と大変類似していることに、気づかされる。

ユングは、人間の心が、意識の世界と、無意識の世界から成り立っていることを体系づけた心理学者であるが、この二つの世界は、互いに相反する要素を持つ世界であり、又、相補的に存在している、というのである。人間の心は、元来二つの相反する要素で、成り立っているが、劣性の要素(つまりこれが、無意識の領域に属している)に、人は気づきにくいとも言っている。たとえば、人間の心に存在する、内的傾向(内向)と外的傾向(外向)、思考と感情、等は、互いに他と対極を成し、相補的性格を持っているのであるが、片方は、無意識の領域に存在するため、自分でもなかなか気づきにくい。そのため、人は意識の領域に現れた一方の性質にのみ従って生きていくことになりやすいのである。しかし、人間の心は、対極間のダイナミズムに支えられて、一つの全体性、統合性(psychic totality 又は、self [自己]とユングは呼ぶ)を持っているのであり、自分の中の劣性な部分と直面し、それを統合し、自己を実現することこそ重要なことだと、ユングは、述べている。つまり、無意識の領域に、目を向け、自分の中の劣性な要素を意識し、統合しようとする努力こそが、ユングの言う「自己実現」なのである。そして、この「自己実現」によって、人は自分の可能性を認識することができ、又、調和のとれた心的状態を得るのである。「自己実現」とは、高次の心的状態を意味するのであり、「自己実現」への努力こそが、人生の最終的目的地だとユングは、言っている。

このユングの「自己実現」の思想から考えてみると、ウルフは、自分の無意識の領域に属する要素を認識しており、常にそれを統合しようとしていたと思われる。つ



ユングにおける自我と自己  
 (ユングは、ego と self の相互作用と対決を主張している)

まりウルフは、作品の中において、「自己実現」の過程を如実に表わし、又、高次の精神の統合を希求していたと言えるであろう。ウルフの求めていた、両性具有的内的調和とは、自己実現された、高次の調和のとれた、言い換えれば、完成された心的状態とも考えられる。芸術が——特に文学が——人間の内面表現である以上、ウルフが、このユングの言う「自己実現」に向い、作品中、高次の心的状態を希求していたことは、彼女の作品の芸術性の高さを示すことになるのではないかと。

又、ユング理論において、対立した精神の統合性が強調されるものとして、反対物の合一を示す、男性と女性の結合の姿が、自己実現した自己の象徴としてしばしば表われる。その一つの例として、ユングは神話や夢によく出てくる自己の表象、‘Cosmic Man’のイメージを上げて、次のように述べている。

His [Cosmic Man's] image is present in the minds of men as a sort of goal or expression of the basic mystery of our life. Because this symbol represents that which is whole and complete, it is often conceived of as a bisexual being. In this form the symbol reconciles one of the most important pairs of psychological opposites—male and female.<sup>17</sup>

ここで、言っている、“a bisexual being”は、“an androgynous being”と同じ意味だと考えられる。つまり、調和のとれた高次の精神状態の象徴として、ユングも又両性具有のイメージをとりあげているのである。そしてさらには、“the Cosmic Man is the goal of creation.”とまで言っている。このことは、心理学的に

考えても、両性具有理論が、芸術にとって重要な意味を持つことがわかる。

ユングにおいて、統合された全体性が人格化されたものでなく、幾可学的図形として生じてくる場合がありそれが曼荼羅である。曼荼羅とは、修法上の用具で円形をした図形であり、観念を通じて、絶対の境地に入った人物の状態などが描かれたものである。円形という図形が調和、統合を象徴することは、容易に頷けることであるが、興味深いことにはウルフも又、円形のイメージを好んで小説に用いていたのである。例えば、次のような文がある。

She held in her hands for one brief moment the globe which we spent our lives in trying to shape, round, whole, and entire from the confusion of chaos. (*Night and Day*, p.533)

Let us again pretend that life is a solid substance, shaped like a globe, which we turn about in our fingers. (*The Waves*, p.178)

このような“globe images”について、Dorothy Brewster は、次のように述べている。

To bring inner and outer into harmony is the aim of many of Virginia Woolf's experiments in technique; and this harmony, when achieved at rare moments, is the perfect flowing together of stream of consciousness and the stream of events. It is symbolized by one of her favorite images, that of globe,....<sup>18</sup>

このことを裏づけるかのようによ、ウルフは、1928年の日記に“... I should like to take the globe in my hand and feel it quietly, round, smooth, heavy, and so hold it, day after day.”<sup>19</sup>と記している。この“the globe”とは、人生をたとえて使っているのだが、ウルフが、いかに“the globe image”を希求していたかが伺われる。このようにユングの曼荼羅のイメージは、ウルフの“the globe image”と重なる部分があると思われ、ウルフの自己現実への過程、そして統一された高次の精神を求めめる姿勢が、ここにも伺われる。

また、ユングの「アニマ」(‘anima’)と「アニムス」(‘animus’)の理論は、特にウルフの両性具有理論と密着した思想のように思われるので、付け加えておきたい。ユングによれば、人間は誰でも無意識の領域に、自分と異なる性(sex)の要素を持っていると言う。つまり、男性なら女性的面を、女性なら男性的面を無意識の領域に持っており、それは、ペルソナに対する極面なのであ

る。ユングは、次のように述べている。

No man is so entirely masculine that he has nothing feminine in him. The fact is, rather, that very masculine men have—carefully guarded and hidden—a very soft emotional life, often incorrectly described as ‘feminine’.<sup>20</sup> この男性の中に潜む、女性的“a very soft emotional life”をユングは「アニマ」と呼び、逆に女性の中に潜む、男性的面を「アニムス」と呼んでいる。ユングは、このアニマとアニムスについて、“as the anima produces moods, so the animus produces opinions;...”<sup>21</sup>とも言っている。

無意識界に潜む、このアニマ、アニムスを認識する事は、非常に困難なことであるが、我々は、それを暗黒の世界から見出し、統合してゆく必要がある、とユングは主張している。そしてそれが、先程から論べているユングのいう「自己実現」なのである。自分の中のアニマ、又はアニムスを統合することにより我々は、女性として、男性としてより豊かな自分の個性を生きることができるのである。

このようなユングの説と大変類似した論理を、ウルフは『私だけの部屋』の中で展開しているのである。

And I went on amateurishly to sketch a plan of the soul so that in each of us two powers preside, one male, one female; and in the man's brain the man predominate over the woman, and in the woman's brain the woman predominates over the man. The normal and comfortable state of being is that when the two live in harmony together, spiritually co-operating. If one is a man, still the woman part of the brain must have effect; and a woman also must have intercourse with the man in her.<sup>22</sup> ここにおいて、男性の中の“the woman part of the brain”は、ユングの言う「アニマ」に、又“the man in her”は、「アニムス」に当てはまると思われる。そして、“the normal and comfortable state of being..., spiritually co-operating”という部分は、まさにユングの追求していた調和のとれた精神、自己実現された状態を示していると思われる。<sup>23</sup>

このように、ウルフの両性具有理論は、ユングの心理学と、大変類似した点を持ち、心理学的に考えても、高い次元の思想であることが、明らかになった。それでは、ウルフはこのような心理学に、造詣が深かったのである

うか。ウルフの弟、エイドリアンは、高名な心理学者となったし、ホガース・プレスからは、フロイトの本が1924年から1931年にかけて、出版されている。フロイトは又、ブルームズベリー・グループに友人を多く持っており、ウルフは、1932年4月12日には、フロイトに会っている。又、1939年には、フロイトの“Moses and Monotheism”を読んでいるのである。このように、環境的に考えても心理学はウルフにとって、かなり親しみ深いものだったように思われる。しかし、ウルフ自身は、自分は心理学の知識などほとんど持ち合わせてないと Goldstone 氏宛の手紙で述べている。

I have not studied Dr. Freud or any psychoanalyst — indeed I think I have never read any of their books; my knowledge is merely from superficial talk. Therefore any use of their methods must be instinctive.<sup>24</sup> (1932.3.19.) 『私だけの部屋』が、出版されたのが、1929年であるから、少なくともウルフは、専門的な心理学的知識なく、『私だけの部屋』を書いていたのである。

又、ユングに関しては、Nancy Bazinが、“... Leonard Woolf states in a letter written to me on August 2, 1967, ‘I do not think that my wife ever read anything of Jung and was not familiar [sic] with his works.’”<sup>25</sup> と述べていることから、特に、ユングにも親しんだ形跡は、見当たらない。

これらの事から、ウルフは、特別心理学に、興味を持っていたとは考えられないし、又、特別の勉強もしていなかったことが明らかとなった。つまりウルフの両性具有理論は、単に小説家ウルフの内部から創造されたものである。心理学者の説を先取りしたようなウルフのこの理論に、彼女の肉内的成熟度の高さを感じざるを得ない。

## 4

最後に、ウルフの両性具有理論と、彼女のフェミニズムとの関連性を考察してみたい。

ウルフは、女性の自立を説いた『私だけの部屋』や、男性の横暴ぶりを攻撃しながら平和を擁護した『三ギニー』(Three Guineas)によって、よくフェミニストと呼ばれる。彼女が女性問題に興味を持っていた事は、明らかであるが、彼女は、決して言わゆる人頭に立って、旗を振り女性の権利を勝ちとろうとするような、実践的フェミニストではなかった。彼女は、常に作家として、

内面問題として女性問題を考えていたのである。そしてその中でも彼女の関心は「女流作家として、小説をどう描くか。」ということに集中していたようである。つまり彼女のフェミニズムとは、作家としての姿勢と深く係りのあるものなのである。

『私だけの部屋』では、まず男性の作った規制の概念によって、小説を描くのではなく、女性の見方により、女性独自の小説を書くことを主張している。つまり、自分が女性であることを認識し、自分の思想を持つべきだと言っているのである。このように、女性としての自我に目覚めることは「ブルー stockings」などの初期のフェミニズムの主張である、男性と同じ権利を持つことや、男性のまねをすることは、全く違ったことなのである。ウルフは、男性と女性の相違を強く認識していたのである。

しかし、ウルフは、次に、“to think of one sex as distinct from the other is an effort. It interferences with the unity of the mind.”<sup>26</sup>と気づくのである。つまり、一方の性だけに片寄ることの危険を感じ、調和を求めようになり、それが両性具有理論へと発展してゆくのである。ウルフはまず、女性としての自我に目覚め、次には、そこに留まることなくより高い人間性を求め、両性具有を目指したのである。このような、ウルフの思想を、先のユングの夫人、エマ・ユングが代弁しているように思われるので、引用しておく。

Woman had learned to see that she cannot become like a man because first and foremost she is a woman and must be one. However, the fact remains that a certain sum of masculine spirit has ripened in woman's consciousness and must find its place and effectiveness in her personality. To learn to know these factors, to coordinate them so that they can play their part in a meaningful way, is an important part of the animus problem.<sup>27</sup>

エマ・ユングも又、ウルフと同様、女性の中のアニムスを統合し両性具有の人間となるべきことを主張しているのである。

現代のユング心理学者、ジェーン・シンガーは、我々の接近しつつある時代を「男女両性具有の時代」と呼び、「今日の西欧世界の社会的習慣、風習、風俗の中に、また自分自身の意識や自分の住む世界を拡大する方法を模索しつつある多くの人々の自覚の中に、男女両性具有をめざす、幾多の兆候があらわれている。」<sup>27</sup>と言っている。

## Notes

(ヴァージニア・ウルフの作品は全て、London: The Hogarth Press. による。)

今日、様々な性のあり方が、論議されているが、その中で次第に両性具有の思想が広がりつつあるのではないだろうか。男性のようになっていくとする、フェミニズムの時代は終わった。確かに、女性の意識を目覚めさせたという事で、フェミニズムは「両性具有」に向う第一歩であったと思われる。しかし、今や我々は、フェミニズムを越えたところにある、調和と統一の世界である「両性具有」に向っているのではないだろうか。

20世紀初頭に生きたウルフは、すでにこのような今日の問題に、目を向けていたのである。ウルフは、芸術家として、対極の調和、統一を表わす「両性具有」の世界を求めていた。そして、この「両性具有」思想はフェミニズムという一方的思想を越えた、調和のある、新しい人間のあり方を示す思想として人間学上、存在すると言えよう。このことから考えて、ウルフは Blackstone が言っているように「フェミニスト」(a feminist) というより「両性具有主義者」(an androgynist) であると言った方が、妥当であろう。<sup>28</sup>

## 5

以上見てきたように、ウルフの小説には、多くの二面性が存在し、又、それらが統合されたイメージ、つまり両性具有のイメージも多く見出された。ウルフは、このように文学において、二つの対極の内的調和である、両性具有を求めていたのである。そして、この両性具有は、芸術的見地から考えても、心理学的見地から考えても、高次の次元の思想であり、ウルフのあらゆる思想の基本となった理念だと言えよう。

また同時に、ウルフは人間として、又、小説家として、両性具有であることを望んでいた。ウルフは、シェイクスピアやブルーストを両性具有の偉大な作家と言っており、彼女は、シェイクスピアを目指していたように思われる。しかし、彼女はシェイクスピアにはなれなかったようである。というのは、彼女は両性具有の理論を持ち、それに向って苦悩し努力していたが、人間として作家としては、両性具有の域に達するまでにならなかったように思われる。思えば「内」から「外」へと彼女の作品が変化していったのも、この苦悩と努力によるものであろう。

ウルフは、結局シェイクスピアにはなれなかった。しかし、両性具有を求めることにより、複合化された人生を描くことが可能となったのであり、又、文学に調和と統一を与え、美を生み出すことすらできたのである。

- 1) Virginia Woolf, A Room of One's Own, 1929, p.148.
- 2) *Ibid.*, p.148.
- 3) Edwin Berry Burgum, "Virginia Woolf and the Empty Room" in the Novel and the World's Dilemma (New York: Oxford Univ. Press, 1947), p.123.
- 4) 心理学者、シェルドン・S・ヘドラーは、次のように述べている。「自覚の途上で人は、自分の心を形づくっている二元性に気づく。態動性と受動性、競争心と協調性、自立心と依存心、論理性と直観性などである。しかしながら、この心的二元性のすべてを生み出しているかに見える二元性がある、それが、男と女という二元性である。」(J・シンガー『男女両性具有Ⅰ』人文書院 前書き)
- 5) A Room of One's Own, p.157.
- 6) Virginia Woolf, A Writer's Diary (London: The Hogarth Press, 1953), p.57.
- 7) ウルフの狂気について、Leonard Woolf は、次のように、述べている。  
"The connection between her madness and her writing was close and complicated."  
(Beginning Again: Autobiography of the Years 1911 to 1918, 1964, p.81.)
- 8) Virginia Woolf, Mrs. Dalloway, 1925, p.39.
- 9) *Ibid.*, p.203
- 10) Virginia Woolf, To the Lighthouse, 1927, p. 11.
- 11) *Ibid.*, p.12.
- 12) *Ibid.*, p.286.
- 13) David Daiches, Virginia Woolf (Norfolk, Connecticut: New Directions Book, 1942), p.88.
- 14) To the Lighthouse, p.320.
- 15) Virginia Woolf, "Modern Fiction" in The Common Reader: First Series, p.189. を参照
- 16) Bernard Blackstone, Virginia Woolf: A Commentary (London: The Hogarth Press, 1949), p.21
- 17) C. G. Jung and others, Man and His Symbols (London: Aldus Books Limited, 1964), p.204.
- 18) Dorothy Brewster, Virginia Woolf's London (New York: New York Univ. Press, 1960), 30.
- 19) Virginia Woolf, A Writer's Diary, p.138.
- 20) C. G. Jung, Two Essays on Analytical Psychology, The Collected Works, VII (London: Routledge and Kegan Paul, 1953), p.189.
- 21) *Ibid.*, p.207.
- 22) A Room of One's Own, pp.147-8.
- 23) ウルフ文学と、この「アニムス」「アニマ」論を関連づけている評論に次のものがある。  
・長谷川誠也『文藝と心理分析』春陽堂 S 5  
・Annis Pratt, "Sexual Imagery in To the Lighthouse: A New Feminist Approach," Modern Fiction Studies (1972), p.417.
- 24) Virginia Woolf, The Sick Side of the Moon: The Letters of Virginia Woolf, ed., Nigel Nicolson (London: the Hogarth Press, 1979), p.36.
- 25) Nancy Bazin, Virginia Woolf and the Androgynous Vision (New York: Rutgers Univ. Press, 1973), p.231.
- 26) A Room of One's Own, p.145.
- 27) Emma Jung, Animus and Anima (New York: The Analytical Psychology Club, 1957), p.5.
- 28) Bernard Blackstone, Virginia Woolf, pp25-6. 参照